

ロールシャッハ・テストから見た登校拒否児の特徴

— 非行児との比較から —

安 田 勉

1. 問題

現在、登校拒否、行動異常等の子どもの問題が社会的にも注目を集めるところである。1989年10月30日、文部省から発表された1988年度の「児童生徒の問題行動の実態調査」によれば、「学校嫌い」を理由に、50日以上欠席した児童・生徒は小学校で6,285人、中学校で36,100人である。この数は小学生で1万人に6人、中学生で千人に6.1人の割合であり、10年前の3倍以上の数になる。

このような子どもたちに対して、情緒障害児短期治療施設では、様々な相談援助活動を行っている。その場合、子どもの「問題行動」をどのような立場から評価するかとということがその後の治療的な関わりに大きく影響を与える。

子どもの問題行動を評価する場合、子どもがどのような状況の中で生活をしてきたかということを知ることが重要であることは言うまでもない。すなわち、社会的状況の中で個人を把握するということである。そしてその上で、子どもの心理構造がどのような様になっているかということをも明らかにすべきである。

従って、子どもを取り巻く環境構造および心理構造を理解することによって初めて適切な働きかけができることになる。

収容治療施設においては、子どもの「問題」発生の生活構造を把握した上で、働きかけの主たる対象である子どもについての理解が特に重要になってくるが、治療効果からみてもその理解は不十分である。すなわち、現実療法的な考えに基づく収容治療は、一般的に能動性を有していると思われる非行児に対しては有効であるが、感情表現力そのものが貧困であり、強い非社会性を示す子ども（登校拒否児、緘黙、等）に対してはそれほど効果を上げていないということである。¹⁾このことから、強い非社会性を示す子どもに対して能動性を高めるには如何にしたら良いかという課題が生まれてくる。ここでは、能動性とは、人またはものに関係したいという自発的要求である。この自発的要求が生まれた時に変化の可能性が出てくる。

そこで、本研究は、上述の課題に基づき、治療上著効を上げていない強い非社会性を示す子ども、特に、登校

拒否児の心理構造を、ロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テストと略す）を用い、行動上異なる非行児との比較から明らかにし、治療的方法を探ろうとするものである。

2. 方法

対象は中学1年から3年の登校拒否児群22名、非行児群24名である。手続きとしては、ロ・テストを行い、J.E. Exner, JrのComprehensive systemによる分析に基づき、基本的心理構造指標(EB, EA, Weighted C, Shading)、感情抑圧度指標(FC: CF+C, Lambda)、対人関係指標(Afr, M) 現実検討力指標(X+%)について比較、検討した。

3. 結果

(1) 基本的心理構造指標(EB, EA, Weighted C, Shading)について

基本的心理構造指標に関する結果は表-1、表-2、表-3に示す通りである。

まず、EB(表-1)についてであるが、これは問題解決のタイプを表わすものである。M>Weighted Cである者は、登校拒否児群では9人(41%)、非行児群では11人(46%)である。一方、M<Weighted Cである者は、登校拒否児群では8人(36%)、非行児群では7人(29%)である。また、EB=0:0である者が、登校拒否児群では1人であるのに対して、非行児群では6人である。従って、問題解決における解決のタイプは両群においてそれほど違いはない。しかしながら、非行児群においてEB=0:0が多いということは、自分で考える力もなければ相談することもできないでいる。

次に、EA(表-2)についてであるが、これは心理的資源を表すものである。登校拒否児群では平均が4.3であるのに対して、非行児群では2.2である。ノーマル群(Nonpatient)²⁾が6.7であることから比較すれば、両群共、心理的資源が少なく、非行児群ではさらに少ないことを示している。

次に、Weighted C(表-2)についてであるが、この指標は対人関係における関わり の程度、感情表現の程度

表一 基本的心理構造指標 (EB) * -1)

登校拒否児群		非行児群	
Case No.	EB	Case No.	EB
S-1	1 : 5	D-1	0 : 0
S-2	0 : 0	D-2	5 : 0
S-3	2 : 3.5	D-3	0 : 0
S-4	1 : 0	D-4	0 : 0
S-5	0 : 1	D-5	1 : 0.5
S-6	8 : 1	D-6	1 : 1.5
S-7	4 : 3.5	D-7	0 : 2
S-8	2 : 3	D-8	1 : 4.5
S-9	0 : 3	D-9	3 : 1
S-10	3 : 0	D-10	0 : 1
S-11	2 : 2.5	D-11	2 : 0
S-12	2 : 0	D-12	2 : 0.5
S-13	0 : 1	D-13	0 : 0
S-14	6 : 3	D-14	0 : 0
S-15	5 : 3	D-15	3 : 0
S-16	0 : 0.5	D-16	3 : 0
S-17	1 : 2	D-17	3 : 1
S-18	0 : 1.5	D-18	4 : 0
S-19	2 : 2	D-19	0 : 0.5
S-20	1 : 0	D-20	1 : 0.5
S-21	16 : 1.5	D-21	2 : 3
S-22	1 : 0.5	D-22	3 : 0
		D-23	0 : 0
		D-24	1 : 2

(22名)

(24名)

*-1) EB=M : Weighted Cである。

を表すものでもある。登校拒否児群では平均1.8, 非行児群では0.8である。ノーマル群では3.9である。両群共にノーマル群に比較して低く, 非行児群がさらに低い。すなわち, 人との接触, 感情表現(自分の気持ちを相手に伝える)がしにくくなっていると言える。

次に, Shading (表-3) についてであるが, これは, 心理的な苦痛をどの程度持っているかということを表している。登校拒否児群では平均2.7であるのに対して, 非行児群では1.3である。ノーマル群では2.0あることから考えると, 登校拒否児群が, 現在の状況にかなりの苦痛

表-2 基本的心理構造指標 (M, Weighted C, EA) * -2)

登校拒否児群 平均		非行児群 平均	
M	2.6	M	1.5
Weightde C	1.8	Weightde C	0.8
EA	4.3	EA	2.2

*-2) EA=M+Weightde Cであり, 心理的資源を表す。

表-3 基本的心理構造指標 (Shading) * -3)

登校拒否児群 平均		非行児群 平均	
Shading	2.7	Shading	1.3

*-3) Shading は心理的な苦痛の量を表す。

を感じているが, 非行児群ではそれほど感じていないと言える。

(2) 感情抑圧度指標 (FC : CF+C, Lambda) について感情抑圧度指標に関する結果は表-4, 表-5に示す通りである。

先ず, FC : CF+C (表-4) についてであるが, この指標は感情のコントロールの割合を示すものである。FC>CF+Cである者は, 登校拒否児群では7人(32%), 非行児群では6人(25%)である, また, FC<CF+Cである者は, 登校拒否児群では6人(27%), 非行児群では3人(12.5%)である。FC=CF+Cである者は, 登校拒否児群では9人(41%)で, その内, 0 : 0である者が4人である。非行児群では15人(62.5%)で, その内, 0 : 0である者は12人である。このように, 非行児群では感情を表現することもコントロールすることもできないでいる。

次に, Lambda (表-5) についてであるが, この指標は感情抑圧の程度を表すものである。登校拒否児群では平均2.0であるのに対して, 非行児群では3.1である。ノーマル群の平均が0.8に比較すれば, 両群共高く, さらに非行児群が高い。感情を抑圧し過ぎていると言える。

(3) 対人関係指標 (Afr, M) について

対人関係指標に関する結果は表-6に示す通りである。先ず, Afr についてであるが, この値は感情的な色合いを持った刺激に対する心理的反応性, すなわち, 人との関係を避けているのか否かを見る指標である。登校拒否

表-4 感情抑圧度指標 (FC:CF+C) * -4)

登校拒否児群		非行児群	
Case No.	FC:CF+C	Case No.	FC:CF+C
S-1	0:4	D-1	0:0
S-2	0:0	D-2	0:0
S-3	2:3	D-3	0:0
S-4	0:0	D-4	0:0
S-5	2:0	D-5	1:0
S-6	2:0	D-6	3:0
S-7	0:3	D-7	1:1
S-8	2:2	D-8	3:3
S-9	2:2	D-9	0:1
S-10	0:0	D-10	0:1
S-11	2:2	D-11	0:0
S-12	0:0	D-12	1:0
S-13	0:1	D-13	0:0
S-14	2:0	D-14	0:0
S-15	4:1	D-15	0:0
S-16	11:0	D-16	0:0
S-17	0:2	D-17	2:0
S-18	1:1	D-18	0:0
S-19	0:2	D-19	1:0
S-20	0:0	D-20	1:0
S-21	3:0	D-21	2:2
S-22	1:0	D-22	0:0
		D-23	0:0
		D-24	0:2

(22名)

(24名)

* 4) FC:CF+Cは感情のコントロールの割合を表す。

児群, 非行児群共に平均0.5である。また, ノーマル群の平均は0.75である。次に, Mについてであるが, これは, 人に対する興味の指標でもある。登校拒否児群では平均2.6, 非行児群では1.5である。また, ノーマル群では2.9である。このことから, 登校拒否児群では人の対して興味, 関心を持ちながらも避けているというアンビバレントな状況であると言える。一方, 非行児群では人に対して興味, 関心も薄く, 従って, 人を避けているという状況である。

表-5 感情抑圧度指標 (Lambda) * -5)

登校拒否児群		非行児群	
平均		平均	
Lambda	2.0	Lambda	3.1

* -5) Lambdaは純粹形態反応の割合で, この値が高すぎる場合は過剰な感情抑圧傾向があり, 低すぎる場合は, 感情に巻き込まれてしまう傾向がある。

表-6 対人関係指標 (Afr, M) * -6)

登校拒否児群		非行児群	
平均		平均	
Afr	0.5	Afr	0.5
M	2.6	M	1.5

* -6) AfrはカードVIII-Xへの反応数/I-VIIへの反応数。この値は感情的な色合いを持った刺激に対する心理的反応性を示している。

表-7 現実検討力指標 (X+%)

登校拒否児群		非行児群	
平均		平均	
X+%	0.7	X+%	0.6

(4) 現実検討力指標 (X+%) について

現実検討力指標に関する結果は表-7に示す通りである。

最後に, X+%についてであるが, この指標は人との関わりの中で, 自分の置かれている状況をどのくらい客観的に見ているかという指標である。登校拒否児群では平均0.7, 非行児群では0.6, また, ノーマル群では0.8である。このことから, 現在の自己の状況を客観的に見れないでいる。

4. 考察

まず, 基本的心理構造指標について考えてみると, 心理的な資源は, 両群共にノーマル群と比較して少ないと言えるが, 登校拒否児群が非行児群よりはるかにある。すなわち, 登校拒否児群はノーマル群より少ないものの自分で考えたり相談したりする力がある。そしてまた, 現状における苦痛もより感じている。非行児群は考えることもできない(あるいは, しない)し, また, 相談することもできない(あるいは, しない)でいるし, また人に自分の気持ちも表現できない(あるいは, しない)でいる。そして現状において苦痛もそれほど感じていない。

また、感情抑圧度指標における特徴は、非行児群において、FC:CF+C=0:0が半数見られたことである。このことは感情を表現することもコントロールすることもできない子どもが多いことを物語っている。裏を返せば、対人関係の中で自分の感情、気持ちを表現することができた場合ないしはそうできる人が見つかった場合、自分の状況を考えることなく他者に左右されてしまう結果となる。ということは、治療的に見た場合、非行児にとっては、どのような人間に関わるかということが特に重要となる。人を信用していないということは本当に信用できると思える人にめぐり会った場合、大きく変化するということである。それに対して、登校拒否児群は中途半端な状態で、少ししか自分の感情を表現できないでいる。人を信用して自分の気持ちを表してよいのかどうか迷っている状態である。従って、人を本当に信用するには信用できるかどうかの確認行為が必要であり、その人を信用し、自分の気持ちが言えるようになるまでにはかなりの時間を必要とする。

次に、対人関係指標における特徴は、両群共、人を避けがちであるが、登校拒否児群では人を避けてはいるものの、人と関わりたい、人が関わってくれたら、というような人に対する関心も持っている。対人関係においても登校拒否児の微妙な状況が現れている。

現実検討力指標においても、登校拒否児群は自己の置かれた状況を鑑み、現実を考えた動き方、現実を考えて動かなければならないという思いを持っている。従って、非行児群に見られるような無茶な行動をするということはない。

ノーマル群と比較しながら、全体的に各指標を見ると、両群共、Shadingを除き、ノーマル群から見て同一方向にあると言える。すなわち、現状における苦痛は登校拒否児群がノーマル群よりも多く、非行児群は少ない。それに対して、EA, Weighted C, Lambda, Afr, M, X+%は全てにおいて、登校拒否児群が非行児群よりも状況としては良いという結果になっている。このことはまた、より微妙な状態にあるとも言える。

治療的な関わりを考えた場合、非行児群に対しては、子ども達の行動を受け入れながら、ぐいぐいと引っ張り、一緒に行動してくれるような活動的な人が必要である。従って、動きによって子供に信用してもらい、自分の気持ち表現しそしてコントロールできるようにし、うまく対人関係が持て、考えることができるようにするという方法が考えられるだろう。また、登校拒否児群に対しては、子ども達の感情表現力をより高められるように、じっくりと話を聞き、子ども達の、信用できるか否かの「試し行動」にも耐えられるような人が必要である。従って、子ども達を動かすのではなく、子どもの話、気持ちを聞きながら、自分で考え、行動できる力が育てられるようにするという方法が考えられるだろう。

5. まとめ

本研究においては、両群におけるある程度の相違の発見と治療的な関わりにおける仮説を考えることができた。しかしながら、行動の違いを明確にし、治療的な関わりを明確に提示するような結果は出なかった。従って、登校拒否児と非行児に対する治療的な関わりにおいて明確な方法が出せるような今後の研究が待たれる。また、上述したことも関係するが、本研究においては、子ども達の個々の状況そして具体的な問題行動を捨象し、ロールシャッハ・テストからのみ治療的方法を発見しようとした。従って、子どもを把握するには一面的であり、治療の実践の中で検証されて、より他面的で有効な方法が発見される必要があるだろう。

引用文献

- 1) 西沢哲, 安田勉, 玉井邦夫, 「情緒障害児の収容治療の効果測定」, ロールシャッハ研究 XXVI, 金子書房1984, p.57-p.71
- 2) John E. Exner, Jr 「The Rorschach: A Comprehensive System, Vol 1 Basic Foundations (Second Edition)」 A Wiley- Interscience Publication, 1986, p.278-p.282
この表に基づいて、13歳から15歳までの平均を求めた。他の指標も同様に算出した。